



いずみ

No.59

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 29



《人ノ巢》

上ノ大作

(2 ページに「作者の言葉」)

自作自選 29 作者の言葉

2016年の秋に帯広で行なわれた野外美術展、「ヒト科ヒト属ヒト」展に出品したインスタレーションの作品です。

「巣を自分で作れない生き物って人間だけだなあ」と思ったのをきっかけに作りました。

メインの素材は周りに生えていたオオアワダチソウ。秋には食料がスグに手に入るようにクルミの木に巣を作りました。

(上ノ 大作 1970年、札幌市生まれ、北広島市在住)

タイトル：《人ノ巣》

制作年：2016年

素材：オオアワダチソウ

サイズ：W180×D180×H180 cm

設置場所：帯広市・帯広の森

連載 宮の森の四季 29

本郷新記念札幌彫刻美術館

皆で学んだこの1年

業務係 大場 裕子

平成28年度は、開館35周年を記念し、久々の大きな展覧会として「ロダン展」が開催されました。多くの愛好者で賑わい、初めて訪れた方も少なくはありませんでした。

ロダンは著名な作家ですが、その人柄や作風、フランス近代彫刻の歴史や時代背景など、いざ自問自答してみると十分な知識があるとはいえません。受付・監視員チームでは担当学芸員から話を聞き、作品「考える人」については大きさが三種類に及ぶことを知ったり、関連資料を読んだり、調べたりしてご案内させていただきました。

また、美術館での実務経験が豊富な寺嶋館長から美術館運営に関するお話もお聞きしました。専門性のあることから雑多なことまで、研修内容は魅力的で多岐にわたりました。

特に職務遂行にあたっては、既成概念に固執せず、いかに寛容であるかということの大切さを学びました。美術館が皆様にとって心のよりどころとなり、開かれた場であることを担うのが私たちの使命であることを痛感しました。

皆それぞれが思いやり、よく働き、よく学ぶ1年でした。今後ともサービスの向上に努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。



「古代ギリシアのブロンズ彫刻」講演に寄せて

東京芸大講師 羽田康一

5年前、2012年8月に、馬の彫刻で知られる後藤信夫さんと一緒に北海道を訪れました。後藤さんの2つの代表作、札幌競馬場内の群像「駿馬躍進」(1998)と新冠、優勝メモリアルパークの「オグリキャップ」(2011)をはじめ、馬を表したブロンズ彫刻の数々と、牧場をいくつか、それからせり会場を見て回りました。長い年月、作品制作のために丹念に取材を重ねる中で後藤さんが築かれた人脈の豊かさに感服しました。

その後、札幌彫刻美術館友の会の橋本信夫先生が私たちのギリシアブロンズ研究に関心を寄せて下さり、札幌で講演会をというお話が3年ほど前からあったのですが、今回ようやく実現に漕ぎ着けた次第です。基本的な事柄を分かりやすく説明すると同時に、最先端の研究成果についても伝えるという離れ業を要求されていますが、それは大学の講義でも同じです。ので何とかできるだろうと思います。

まず松本隆さんがギリシア彫刻について初心者向けの導入をします。次いで羽田が、私たちの主たる研究対象である「リアーチェの戦士 AB」をはじめ、「アルテミーシオンのゼウス」「ペイライエウスのアルテミス A」「クイリナーレの拳闘士」「アルテミーシ



オンの馬と少年」「カピトリーノのスピナーリオ」などよく知られた作品について、制作技術に重点を置いて解説します。続いて松本さんが「リアーチェの戦士 AB」の再現制作について紹介します。休憩を挟んで最後に、後藤信夫さんが「アルテミーシオンの馬とジョッキー」および馬のブロンズ彫刻全般について詳しくお話しします。

お聴きになるにつれて、いろいろな疑問が浮かび上がると思います。できるだけ会場でお答えしたいと思いますが、お答えできない場合、後日メールで回答するようにします。

講演をお聴きになるに当たり、図書館などで予め拙著「古代ギリシアのブロンズ彫刻」(2008)に目を通しておいていただくと、より理解が深まるかも知れません。また昨年11月に南イタリア、レッジョ・カラブリアとメッシーナで開催された研究集会「リアーチェのブロンズ」の報告文に、私たちの最近の活動が要約されていますので、ご一瞥いただければ幸甚です。

羽田康一氏の講演は5月28日、友の会主催第2回彫刻セミナーとして道立近代美術館で行われます。6ページに関連記事

橋本信夫・邦江コレクション「アフリカの仮面と彫像」企画展

本郷新記念札幌彫刻美術館で開催（4月22日～6月14日）

本郷新記念札幌彫刻美術館で4月22日から企画展「アフリカの仮面と彫像」が開催される。友の会の橋本信夫会長が若い学究時代、アフリカで研究生生活の傍ら収集した100点余の仮面などを札幌芸術の森美術館に寄贈、そのコレクションからの展示。開催を機に会長と共にアフリカ生活を送った夫人の橋本邦江さんに当時の回想を寄せていただいた。



「アフリカの仮面収集の思い出」

ニューヨーク（NY）に移住して3年余りが過ぎた1975年の夏、夫が突然、赤道に近い西アフリカのリベリア共和国に行く話を持ち出しました。私は熱病研究のためなら命さえかけようとする夫とは違い、不便な生活や当時6歳と11歳の二人の娘達の教育などを考えると二つ返事で賛成することができずにいました。

しかし下見に行った夫は、私が考える間もなく、あんな楽しいところで家族が暮らせるチャンスなど二度とないと言い、着々と赴任の準備を進め、ほとんど騙されたかたちで現地入りしたのです。

夫の所属するNY血液センターのアフリカ支所“Vilab”はリベリア国立医学・生物研究所の一角で、首都モンロビアからは80kmほど離れたところにありました。しかし私達の住居は研究所の敷地内とはいえ、500m以上も離れた一軒家で、新聞、テレビ、電話はおろか電気や飲み水にさえ事欠く有様でした。NYの文化的なざわめきを何よりも愛した私には、咲き誇るブーゲンビリアも鳥の囀りも全て虚しく、到着後の2、3ヵ月は自分をどう支えるかが最大の課題となりました。

橋本邦江

黒人芸術については、NY在住の有名（イサム・ノグチ、ノリコ・ヤマト・プリンス）・無名の芸術家の友人たちにより、多少耳学問させて頂いていたこと、また地理、歴史書の理解や音楽と美術鑑賞を生き甲斐にしている夫の影響もあり、私なりに彫刻類に心がひかれ、NYの自宅には骨董品店で見つけた古いアフリカの仮面を飾っていたほどでした。

リベリアでは、夫の研究と我が家の生活を支え、同時に仮面収集のきっかけを作ってくれた大切な米国人の友人にハリー・ギルモア氏があります。彼は現代版「ターザン」の様な人で本職は動物捕獲師ですが、リベリアのトルバート大統領（当時）の相談役を長く務めていたため、奥地に行くときまるで神様扱いされる程の人気と信用がありました。彼は私にとっても大切な相談役であり、お師匠さんでもありました。また彼の研究所での仕事の一つに夫達の研究（B型肝炎ワクチンの研究開発）を成功させるにはDr. Hashiの家族をホームシックにさせないという使命もあったそうです。

ある日彼が私に「この国にいる間にアフリカの木彫、特にマスクを集めなさい。最

近ドイツから来た仮面収集家によって良いものがどんどんなくなっているの、近い将来、手に入らなくなるだろう。ここで暮らすには何かに集中しなければいけないよ！Kunie がメソメソしては Hashi も仕事ができないし、子供たちも不幸になる。あなたがこの土地に馴染んでもっと楽しむべきだ」と元気付けてくれたのです。そして彼の直属のハンター6人を連れてジャングルの遺跡を探検したり、トラックに乗ってダイヤモンド探しに出かけたり、さらにそこで見つけたいろいろな貴石の加工の仕方まで教えてくれたものです。時には、野獣の肉やサルや猿の姿焼きなどを村長さんに献上し、部落に泊めてもらいながら住民と親密になるうちに、様々な民具や仮面にも自然に遭遇するようになりました。ある村ではジュラルミンの鍋釜の普及で不要になった古い土器類を一山買わされたこともあります。また、古いものが欲しいと伝えると、瞬く間に行列ができ、奴隷の足枷、銅の腕輪、錆びた刀、貝や針金状のお金など思いがけないものを手に入れたこともありました。

私は“Vilab”で半日助手として働いて得た収入を全てこれに当てていました。

この頃ワシントン DC のスミソニアン研究所アフリカ館の文化人類学者がリベリアのカチントン大学の博物館で民具等について調査活動を始めていましたが、その助手兼カメラマンで米国の平和部隊所属の若いリー夫妻が“Vilab”に転属して来ました。この二人のお陰で、リベリア各地の部族の生活習慣、仮面の使用目的や意味なども次第に理解できるようになってきたのです。

折しも私が仮面を集めていることを知った通称「チャーリー」と呼ばれている骨董品行商の面々が我が家に入出入りするようになりました。時間と小遣いのあった私はこ

の「チャーリー」の一人に、木彫りの先生を探して貰い、自分で木彫りを習うほど気合が入ってしまいました。後で知ったのですが、彼はポロ秘密結社の伝統的な仮面作りのボスで、いつも森の奥深くで人目を避けて彫っていて、誰にも住まいを明かしたことがないとのことでした。

リベリアでの生活もすでに半年が経ち、木彫りに熱中するなかで気分が沈んでしまうことがありました。なぜなら生活環境が想像を遥かに超えて過酷だったからです。リベリアの気候は乾期と雨期がほぼ半々ですが、乾期の渇水、竜巻、山火事や雨季の洪水、豪雨、雷、停電などに絶えず脅かされ、現地の人々の助けなしでは過ごせなかったのです。そのため近くの村から常時3人（A 洗濯兼料理手伝い、B 庭の草刈り人、C ガードマン）を雇い、昼間はこの3人のお陰で様々な難を逃れていました。それでも彼らの留守中に、ロブスターと見間違ふほどの大きなサソリの訪問、見たこともないカラフルな毒蜘蛛や毒蛇などの出没、また夜更けに人食い蟻の大群に侵入される等々、昼夜を問わず訪れる危機に直面することも多く、子供たちを守るのが精一杯でした。

しかしこの環境を楽しめる夫と子供たち、危険と感じて楽しめない自分との戦いも日々の流れが少しずつ私を変えてくれました。

かくして、アフリカについて右も左も分からず自分を見失いかけていた私がいつしか友人も増え、水を得た魚のようにこの風土に順応してハリーと張り合っ仮面集めに没頭し、同時に70~80名の従業員とその家族とも仲良くしながらリベリアでの生活をエンジョイできるようになったのです。

今、当時を思い出すと夢のような気がいたします。

にぎやかに 2017 年友の会新年会

流麗なソプラノ歌唱に酔う

彫刻美術館友の会恒例の2017年新年会が1月22日、札幌・中央区の宮の森ミュージアムガーデンで催された。新年会には来賓を含め37人が参加、今年の活動の抱負を語りながら親睦を深めた。

同ミュージアムでの新年会は3年連続。毎回、座席の配置などが工夫され、結婚式場の華やいだ雰囲気の中で冒頭、昨年一年間の会の活動ぶりをまとめた映像がスクリーンに映し出された。彫刻清掃や仙台彫刻研修旅行のシーンなどに参加者たちが懐かしそうに見入っていた。



橋本会長が「来年の北海道命名150周年に向けて、今年も大いに芸術文化を盛り上げよう」と挨拶、ついで亀谷隆さんが中島公園にある武蔵野美大創設者である<木下成太郎先生像>の修復が同大で持ち上がっていることを報告して乾杯の音頭を取った。



会食をしながらのテーブルスピーチなどが行われ、初めて参加した彫刻美術館の寺嶋弘道館

長が「これからますます友の会と密接な関係で協力したい」と述べるなど、和やかな宴が盛り上がった。

このあと、若手ソプラノ歌手・川島沙耶さんとピアニスト・山本真平さんのミニコンサートが行われ、プッチーニの歌劇、黒人霊歌、日本歌曲などを表情豊かに歌い上げ、会場を魅了した。最後に恒例の全員合唱で「大きな古時計」を歌って新年会を閉じた。

2017年度友の会総会5月13日開催

◇日時：5月13日（土）午後1時から

◇会場：わくわくホリデーホール

（札幌市民ホール：中央区北1西1）

2016年度活動報告、同決算報告、2017年度活動計画案、同予算案などを審議。会員の多数の出席を期待しています。

第2回彫刻セミナー

「古代ギリシアのブロンズ彫刻」

5月28日 道立近美講堂で開催

黒川毅武蔵野美大教授を迎え、昨年7月、札幌彫刻美術館で開いた友の会主催、彫刻セミナーの第2回として5月28日、道立近代美術館講堂で文化講演会「古代ギリシアのブロンズ彫刻」が開かれる。

今回はイタリア南部、リアーチェ海岸



の海底から引き揚げられた古代ギリシアのブロンズ彫刻《リアーチェの戦士像》を巡ってこの彫刻の調査研究に携わった東京芸大の羽田康一氏ほかを招いて古代ギリシアのブロンズ彫刻についてのセミナーを開く。

司会は常田益代北大名誉教授

プログラム

5月28日 13：30～道立近美講堂

◇松本 隆（武蔵野美大）

「リアーチェの戦士」像の再現制作

◇羽田康一（東京芸大）

古代ギリシアのブロンズ彫刻

◇後藤信夫（ブロンズ彫刻家）

「アルテミシヨンの馬と少年」から現代へ

円山動物園

《よいこつよいこ》像 移転、修復へ 札幌市が新年度予算に計上

友の会が数年来要望していた札幌市円山動物園の《よいこつよいこ》像の補修がいよ



いよ実現する見通しとなった。2月、円山動物園の担当者から連絡があった。

現在、動物園前広場のロータリーに置かれている像を正面左側に移設し、あわせて像全体の修復をするという。

《よいこつよいこ》像は彫刻家・山内壯夫（1907-75）が1952年制作したもので、札幌市内のコンクリート像としては最古のものとされる。

近年、素材の劣化などから像全体に塗料のはがれ、亀裂が目立つなど像の倒壊の危険性が

ら友の会が再三、市に対して修復を要請していたもので、友の会では「私たちの要望が入れられ、ひとまず良かった」とほっとした声が出ている。

橋本会長 NORTH シンポで講演

障害者と彫刻清掃で心の繋がり

北海道地域ネットワーク協議会（NORTH）の「第22回インターネットシンポジウム2017」が3月2、3日の両日、北大学術交流会館で開かれ、同会会員でもある橋本信夫友の会会長が日ごろ行っている彫刻清掃活動をとおしての障害者との交流をテーマに講演した。

シンポジウムのテーマは「地域の社会福祉、医療、介護の近未来—情報通信技術（ICT）の活用により地域医療はこうな



る」。

初日のトップバッターで登壇した橋本会長は「野外彫刻の

清掃と心のリハビリをつなぐ市民文化運動」と題して講演、日ごろ友の会が取り組んでいる「北海道野外彫刻デジタル美術館」構想の進み具合と視覚障害者や精神科のリハビリ患者などと一緒に行っている彫刻清掃活動を報告、「共に彫刻の美しさを感じ、その美を守ることによって心をつないでいける」と強調した。

若手芸術家が技競う さっぽろ雪像彫刻展 彫刻美術館本館前庭

若手造形作家などが技を競う「さっぽろ雪像彫刻展2017」が1月20日から3日間、本郷新記念札幌彫刻美術館本館前庭で行われた。

参加したのは児玉陽美さんから6人の作家と道芸術デザイン



専門学校生、道立札幌平岸高校生で趣向を凝らした雪像が美術館を訪れた人たちの目を慰めていた。

事務局日誌

▼2016年12月18日＝故仲野三郎会員宅へ弔問▼26日＝会報「いずみ」58号発送▼2017年1月11日＝札幌彫刻美術館寺嶋館長訪問(美術館との連携など協議)▼12日＝定例役員会(第2回彫刻セミナー計画など協議)▼22日＝2017年新年会(宮の森ミュージアム)▼2月4日＝彫刻美術館訪問(古代ギリシャ彫刻講演会協力依頼)▼9日＝定例役員会(会報編集企画ほか)▼10-12日＝「雪あかりin中島公園」協力▼27日＝彫刻学習会(野外彫刻デジタルデータの現況報告)

編集後記

▼今号は思いがけず友の会が関係する二つのイベントの関連記事が重なった▼風見鶏は5月開催予定の「古代ギリシアブロンズ彫刻」講演会の前触れ。羽田康一氏の講演の予告編として読んでいただければ▼橋本会長夫妻コレクションの「アフリカの仮面と彫像展」では夫人の橋本邦江さんからアフリカ滞在時代の貴重な思い出を披露してもらった。コレクション収集の裏話が興味深い。(大内)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」 No.59

2017年4月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集者 大内 和

(札幌市清田区清田5-4-6-30)

011-884-6025

印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」59号 目次

自作自選29《人の業》	上ノ大作	表紙
作者の言葉		2
宮の森の四季29「皆で学んだこの一年」	大場裕子	2
風見鶏「古代ギリシャのブロンズ彫刻」	羽田康一	3
寄稿「アフリカの仮面収集の思い出」	橋本邦江	4-5
友の会ニュース		6-7
2017年友の会新年会/古代ギリシャのブロンズ彫刻」講演会予告 /2017年度友の会総会開催予告/<よいこつよいこ>像修復へ/橋本 会長 NORTH で発表/彫刻美術館雪像展		
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか		8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■企画展「アフリカの仮面と彫像」

4月22日(土)～6月14日(水)

■貸館 「新制作展—北海道ゆかりの作家たち」

6月18日(日)～25日(日)

記念館

■所蔵品展「本郷新と札幌彫刻美術館」

開催中 ～4月9日(日)まで

■所蔵品展「本郷新の人と芸術」

4月22日(土)～通年

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<http://sapporo-chokoku.jp>